
テイオフィラス アサモア先生を偲んで

経営学部長 大橋 哲

会う人を一瞬で魅了する普段の美しいアサモアスマイルとは対照的な鋭い表情で、「学生のことを思って国際教育は自分のミッションとして全力でやってきたよ」とアサモア先生が私につぶやいたのが、どのときであったか今ははっきりと思い出せない。ただ、親しみを増す語尾と独特のイントネーションに彼のやや甲高い声を載せて、今その言葉を心中で再現するのは実に容易である。それがいつ発せられた言葉であったか特定できないのは、彼がそう述べるのが自然であった状況があまりに多く思い浮かぶためだと思う。

長く経営学部国際委員会委員長の任にあった彼の国際教育ビジョンの作成を手伝った時であったか、海外プログラム運営に関して難しい決断を迫られた時であったか、ゼミ活動と国際体験を有機的に結びつける話をした時であったか、カンザス大学との交流を維持するための方策をあれこれと探った時であったか、健康維持にも決しておろそかではなかった彼が放課後体育館のジムで汗を流した後に行き合わせ、暗くなったキャンパスを歩きながら話した時だったか、彼が国際センター長に就任して全学の国際教育を考える立場になった時であったか、或いは、彼がその役割を私にバトンタッチする際の彼の離任パーティーの時であったかというふうに、その言葉が発せられたはずの時間が次から次に浮かんでくる。彼との20年以上に渡る交流のどの時点を振り返っても、彼があのような言葉を口にした時としてふさわしく思えてしまう。

平成の終わりとなる31年1月9日のアサモア先生ご逝去の知らせは、前年度の卒業式に車椅子に乗りながら出席してくださった彼の復帰を心から願っていた我々に大きな悲しみと喪失感をもたらしたが、勇敢に病魔と向き合った彼の闘病生活、最後までゼミの学生を心配し続けた様子などが伝えられ、どうにかして彼の貢献に報いる方法は無いかという声が上がった。形式的な感謝の表明とはいえ、彼を名誉教授に推薦することが決議され全学の承認を経て6月14日に、長男のダニエルさんに来校を願い厳粛な雰囲気の中、名誉教授の称号の授与式が挙行された。また、親族等による葬儀とは別に、7月28日にアサモアゼミの卒業生が中心となり、ホテル横浜キャメロットジャパンにおいて、アサモア先生を偲ぶ会が盛大に催された。会の中で、医学生である長女のアビさんから、1981年に国費留学生として来日する以前のアサモア先生が、牧師の叔父に養育されたこと、音楽専門学校に入学したこと、中高での教育経験もあること等、私が知らなかったアサモア先生の一面が多く伝えられた。ただ、ご家族の目から見る教育者としての父の姿は、私が思う彼の姿、つまりは学生を思い彼らに尽くすことをミッションとして生きた彼の姿そのものであった。アサモア先生の教育に対する情熱を受け継いでいくことこそが、真に彼の貢献に報いることであると肝に銘じた。